

【書評】

細井浩志編『新陰陽道叢書 第一巻古代』（名著出版）

黒木 香

はじめに

名著出版より昨年2020年10月に『新陰陽道叢書』の刊行が始まった。「第一巻古代」の編者は活水女子大学国際文化学部日本文化学科に所属する私の同僚である細井浩志氏である。私の専門は平安時代文学である。歴史的な観点で論文を執筆することもあるが、日本史研究に関しては専門外であり、このような書物の書評を記す任には堪えない。ただ、本書には日本文学関連の論文も掲載され、また、平安時代文学とも関連深い内容も多く含まれているので、及ばすながら内容紹介を行ないつつ、記していきたい。

『新陰陽道叢書』の刊行意義

先に刊行された『陰陽道叢書』（以下『旧叢書』と略す）が1991年9月より刊行開始であるから早30年近くが経過している。『旧叢書 第一巻古代』は村山修一・下出積與・中村璋八・木場明志・小坂眞二・脊古真哉・山下克明氏らによる編集で再録論文も多かった、今回の『新陰陽道叢書』（以下『新叢書』と略す）は、全五巻で、各巻一人の編者による。

『旧叢書』では「古代」の内容は、

- I 陰陽思想から陰陽道へ
- II 物忌と方違え

と大きく分けられていた。その後陰陽道に関連する研究は大きく進展した。研究の方向も多方面に広がり、その進展を反映し、『新叢書』では、

- I 「陰陽道」概念と陰陽道の成立
- II 占い・呪術・方違え
- III 陰陽道の制度
- IV 暦・天文・漏刻
- V 資料論

のように分けられている。

各巻巻頭に「総論」があり、陰陽道についての各時代、各方面の研究の流れの全体像がわかるようになっている。『旧叢書』でも巻末に解説があったが、今回はより詳細な解説が付けられている。「古代」では編者細井氏の「古代陰陽道研究の成果と課題」によって、収録論文の内容についても門外漢の私にもより理解できるようになっている。

さらに収録16編の論文のそれぞれの末尾の引用文献により、各方面の研究の展開と現状がわかるようになっている。

古典文学に関わらせて

古典文学では陰陽道に関係深いものとして、安倍晴明説話がよく知られている。彼の人物造形の変遷を捉えるのは文学研究によることが多い。もちろん説話の晴明を実際のもので捉えることはほとんどないだろうが、晴明を含めた陰陽師がどのような立場にあり、どのような技能を發揮したかについては陰陽道研究の成果によることでよりその人物像が明確になる。

平安時代文学作品においては「陰陽師」「物忌み」「方違え」が頻出する。

女性による日記文学のさきがけとなった『蜻蛉日記』には当時の貴族女性たちの神仏への依存とも見える尊崇の様子が「物詣で」という行為を通して描かれる。さらに「夢」と「夢解き」、「物忌」なども記されている。それらは作者道綱母自身のためだけではなく、夫藤原兼家や子ども道綱に関わる。道綱母は夫兼家との関係に振り回されることが多々ある。例えば、自らの出産後幾ばくもたたぬうちに、夫兼家の別の女性との関係が発覚する。そのきっかけは、

これより、夕さりつかた、(兼家)「内裏の方、塞がりけり」とて出づるに、心得で、人をつけて見すれば、(召使い)「町の小路なるそこそこになむ、とまりたまひぬる」とて来たり。⁽¹⁾

説が分かれる箇所であるが、兼家は内裏の方向が塞がるという理由で道綱母宅を出て別の女性の家に行く。道綱母はそれを変だと思ひ、下男に探らせ、案の定そうだったと自分の違和感の理由に納得するのである。もし、このような解釈をするのなら、方塞がりは嘘とまではいかないものの、それを利用していることになる。虚構作品ではあるが『源氏物語』の主人公光源氏は、女性との出会いを求め方違えにかこつけて出かける。こうしたことを男性貴族たちが行っていたかどうか不明だが、女性たちが日記や物語に書き込んだところから見れば、大いにあり得たのではなかろうか。

一方で、息子道綱の元服に際しては、方塞がりであるが夜が更けたから、と言って道綱母宅に留まっている。より重要なことがあれば、方塞がりを気にするようすがない。

一方で、道綱母宅で「明日は物忌なるを、門強くささせよ」と言って騒ぎ、道綱母をうんざりさせもする。そして、兼家が物忌に籠もっている期間をねらって道綱母は山寺(鳴滝般若寺)に向けて出奔するのである。身分高く朝廷行事に関わることが多い兼家は、無論陰陽道の忌みを守り、そしてある時にはそれを口実にも使う。そのような現状を『蜻蛉日記』からは見ることができよう。

また、『枕草子』を見ると、

・ものよく言ふ陰陽師して、川原に出でて、呪詛の祓へしたる。(第28段「心ゆくもの」)⁽²⁾

・法師陰陽師の、紙冠して、祓したる。(第105段「見ぐるしきもの」)

・陰陽師のもとなる小童こそ、いみじうものは知りたれ。祓へなどしに出でたれば、祭文など読むを、人はなほこそ聞け、ちうと立ち走りて「酒、水、いかげさせよ」とも言はぬに、しありくさまの、例知り、いささか主にも言はせぬこそ、うらやましけれ。さらむ者がな、使はむとこそ、おぼゆれ。(第285段「陰陽師のもとなる小童こそ」)

- ・三月ばかり，物忌しにとて，かりそめなる所に，人の家に行きたれば，……
(286段「三月ばかり」)
- ・また，同じ物忌しに，さやうの所に出でたるに，二日といふ日の昼つ方，いとつれづれまさりて，ただ今もまゐりぬべきこちするほどにしも，…… (286段)
- ・方違へに行きたるに，あるじせぬ所。まいて節分などはいとすさまじ。
(第22段「すさまじきもの」)

など，陰陽師や陰陽道に関わる記述が複数箇所ある。取り上げているのは「ものよく言ふ陰陽師」や「陰陽師のもとなる小童」「法師陰陽師」などである。一般的なものに注目しないのが清少納言が『枕草子』を執筆するときの態度ではあるが，陰陽師を恐ろしい存在と捉えているようすはない。『今昔物語集』などの説話中では賀茂忠行の弟子としての晴明の如き「小童」の気のききようを「うらやましけれ」とすら言っている。

また，方違えであろうか，他人の家への滞在を「つれづれ」と感じたり「あるじせぬ」ことへの不満を記している。こうした態度は同輩の女房たちの同意を得るものでもあったろう。『枕草子』からは陰陽師を畏怖する態度も物忌みや方違えを尊重しようとする気持ちすらあまり伝わってこない。むしろ揶揄しているようにすら見える。つまり、『枕草子』を読むだけでは，当時の陰陽師たちの行為がどのようなものであったのか，現実的にはどれほどの敬意を払われていたのかはわからないのである。このような見方も可能な女性による作品に接していると，ともすれば，陰陽道，陰陽師への男性貴族たちの意識は見えにくくなる。

また，私の専門分野である日本文学の関連の深い論考として，中島和歌子氏の「古代陰陽道の占いと物忌」や山下克明氏の「式神の実態と説話をめぐって」も収載されている。中島氏が物忌に関連して「平安文化・文学を理解する上で非常に重要である」と述べられているように，古典作品を読むためにはその時代の習慣やものの考え方を熟知することは必須である。

そうではあるが，専門分野が異なると論文に気づきにくいことがままある。

例えば本書には，繁田信一「法師陰陽師と平安時代中期の民間呪術的職能者たち」という論考があり，先の『枕草子』にも見える「法師陰陽師」について述べられている。文学研究の内容とも重なる点も多く，これまで文学なら文学一方の側からしか見えにくかった陰陽師の姿が，より明確に捉えられるようになった。専門横断的に研究論文に接近する最初の手がかりとして，この叢書は大きな役割を果たすだろう。

今後、『新陰陽道叢書』は，

- 第二巻 中世 赤澤春彦編
- 第三巻 近世 梅田千尋編
- 第四巻 民俗・説話 小池淳一編
- 第五巻 特論 林淳編

と刊行が続く。第四巻として「民俗・説話」が用意されていることも期待されることの一つである。

- (1) 『角川ソフィア文庫 蜻蛉日記』川村裕子訳注 (角川書店，2003)
- (2) 『角川ソフィア文庫 新版枕草子』石田穰二訳注 (角川書店，1979～1980)